永遠の真理

ETERNAL TRUTH

2018年 11月

「恐れるな、小さい群れよ」「世界の出来事の土台となる預言（II）」「それが信仰」「筑前煮」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

世界の出来事の土台となる預言（II） 4

聖書の教え

朝のマナ

恐れるな、小さい群れよ 7

Fear Not, Little Flock

現代の真理

「それが信仰」」 38

神の憐れみの最後の招き

力を得るための食事

筑前煮 44

お話コーナー

「過越（すぎこし）の夕食にて（III）」 46

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465　FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015　高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス www.4angels.jp

発行日　2018 年 10 月 14 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Sozai on Front page, Sermon View on page 40

Printed in Japan

聖霊を与えられる能力

キリストは、ご自分の仲保の能力によって、ご自分の僕らに聖霊のご臨在をお与えになる。(教会への証 7 巻 30)

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう」(ルカ 6:38)。･･･

一度キリストの愛を味わった心は、もっと深く飲むためにたえず呼び求める。そして与えるにしたがって、より豊かに、より潤沢に受けるのである。魂に対する神の啓示はすべて、知る能力と愛する能力を増し加える。魂は「もっとあなたを」と叫びつづける。すると、聖霊はいつも「さらに豊かに」(ローマ 5:9,10 英訳) と答えて下さるのである。というのは我らの神は、「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さる」ことを喜ばれるからである(エペソ 3:20)。失われた人類の救いのためにご自身をむなしくされたイエスには、聖霊が限りなく与えられた。同じように、主が内にお住まいになれるように全心をささげる時、キリストに従うすべての者に聖霊が与えられるのである。わたしたちの主ご自身が、「御霊に満たされ」なさいと命令されたが (エペソ 5:18)、この命令は成就する約束でもある。(祝福の山 25)

聖霊は、イエスを見ている魂を助けのないままにしておかれない。聖霊はキリストの事がらをとりあげて、それを魂に示される。もし目をキリストにそそいでいるなら、みたまの働きは、その魂が神のみかたちに一致するまでやまない。純粋な愛の要素が魂を拡大し、もっと高い教養と天の事物についてのもっと多くの知識を受けいれる余地を与えるので、その魂は、完全に達するまでは満足しない。(各時代の希望中巻 7, 8)

みたまは心をきよめ、思いを新たにし、神を知り愛する新しい能力をわれわれに与える。(各時代の希望上巻 225)

キリストはご自分の教会に聖霊の賜物を約束してこられた。･･･ 救い主は、次のように言われた、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、･･･ わたしの証人となるであろう」。この賜物を受けるとき、他のすべての賜物がわたしたちのものである。なぜなら、わたしたちはこの賜物を、キリストの恵みの富の豊かさにしたがって受けるからである。そしてこのお方はすべての魂をその受ける能力にしたがって満たそうと待っておられる。そうであれば、わたしたちは死の眠りに陥らないように維持するだけわずかばかりのこの祝福で満足することなく、勤勉に神の恵みの豊かさを求めようではないか。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1892 年 3 月 29 日)

聖書の教え–現代の真理–

第 7 課　世界の出来事の土台となる預言(II)

3. 青銅の腹と大腿

「･･･第三に青銅の国が起って、全世界を治めるようになります」（ダニエル 2:39）。

ギリシャの王であるアレキサンダー大王は、凄まじい速さで彼の軍隊を率いて戦いました。紀元前 331 年のアルベラの戦いにおいて、ペルシャの王であるダリオス三世は完全に打ち負かされました。アレクサンダー大王は大量のお酒と最低な情欲におぼれました。世界を征服したのち、彼の時間は無節操な宴会のために費やされました。これが彼の破滅となり、紀元前 323 年、彼は大宴会中に 32 歳という若さで死にました。野心的な指導者により、彼の王国はまもなく彼の 4 人の将軍たちの下で分割されました。王国の偉大さは短命に終わり、その分割は他の預言的な見込みを成就したのでした。

ローマは、紀元前 190 年にギリシャ帝国におけるシリアの領土を支配し、紀元前 168 年にはマケドニアの領土を支配し、その同じ年にエジプトはローマに屈したのでした。

4. 鉄の脚

ローマという鉄の王国は、世界を征服した四番目の帝国になりました。ギボンは次のように記述しています、「その共和国の腕は、戦いにおいて時に勝利をおさめた。戦争においていつも勝利し、素早くユーフラテス川、ドナウ川、ライン川、そして海へと向かった。そして金、銀、青銅の像、すなわち国々やそれらの王の象徴は、次々にローマという鉄の帝国により打ち破られた」（ローマ帝国の没落と崩壊、38 章一段落目「概説」）

キリストの時代、ローマ帝国は南ヨーロッパ、フランス、イギリス、オランダにおける重要な領域、スイス、ドイツの南部、ハンガリー、トルコ、ギリシャ、およびアフリカとアジアにおける広い領土を支配していました。

「そのころ、（全世界に課税するために）全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。」（ルカ 2:1）

ローマの命令によって執行された世界の最初の課税は、このローマ帝国の大きさを物語っています。

どうして、この強力で安定した帝国が地上から消滅したのでしょうか。人の見解では、ほとんど不可能のように見えました。しかし、預言的な見地から、さらに次の光景が起こることになっていました。

5. 鉄の足と粘土

「あなたはその足と足の指を見られましたが、その一部は陶器師の粘土、一部は鉄であったので、それは分裂した国をさします。しかしあなたが鉄と粘土との混じったのを見られたように、その国には鉄の強さがあるでしょう。その足の指の一部は鉄、一部は粘土であったように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう」(ダニエル 2:41、42)。

それまでの帝国とは異なり、ローマは次に続く国家によって戦いに敗れたのではありませんでした。人々が贅沢な生活をおくり、また自己満足と不節制という堕落を経験したことにより、ローマ帝国は、その内部から弱体化していきました。正式なローマ王国の領域を構成していたのはギリシャの西側に位置する地域であり、これが鉄の脚によって表されていました。この地域は分裂により、10 の独立した王国に分けられましたが、これらが、像の 10 本の足指に象徴されていました。ある国々はもともとの鉄の王国の強さを保持していましたが、ある国々は粘土によって象徴されていたようにもろかったのです。

この分裂は、紀元後 351 年から 456 年の間に生じました。その 10 の部族とは、ロンバード、フランク、東ゴート族、西ゴート族、ブルグント族、スエビ族、ヘルリ族、バンダル族、アレマン族、サクソン族でした。ダニエル章の 8 章、および 9 章の記載された後の預言では、これら 10 の国のうち 3 つの国は他の権力により抜かれる (滅ぼされる) ことになっていました。その預言は真実となりましたが、残った国家は、今日イタリア、フランス、イギリス、オランダ、スペイン、ポルトガル、そしてドイツのように、ヨーロッパの国家にその足跡をたどることができます。

預言は、次の出来事としてキリストの来臨を示していますが、他の預言は、キリストの来臨までの間に生じる展開を指し示しています。これらの預言は、本課以降でふれていきます。

「あなたが鉄と粘土との混じったのを見られたように、それらは婚姻によって、互いに混ざるでしょう。しかし鉄と粘土とは相混じらないように、かれとこれと相合することはありません。」(ダニエル 2:43)。

その後、幾世紀にも渡り、ヨーロッパの国々は、単一の政府の下で再度、統合するための努力を重ねてきました。武力によっても、外交によっても、だれも鉄と粘土を共に手に入れることには成功していません。多くの戦争が行なわれましたが、役に立ちませんでした。一人の支配者の下に諸国家をまとめようと婚姻が結ばれました。ヨーロッパにおけるすべての君主たちは、互いに雑婚によりつ

ながっていますが、神の預言どおり、依然として分裂は存在しています。預言は次のように述べています、「それらは一つになることはないでしょう」。

シャルルマーニュは、ヨーロッパを一つの王国の下におこうとしました。また、チャールズ5世、ルイ14世、ナポレオン、ウィルヘルム、ヒトラー、ECも同様の試みを行ないました。それらは一時的には成功したかのように見えましたが、永続的な団結には至りませんでしたし、これからもないのです。

次に起こる出来事は何であろうか？

1. 手によらずに切り取られる石

「それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすでしょう。そしてこの国は立って永遠に至るのです。一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と、青銅と、粘土と、銀と、金とを打ち砕いたのを、あなたが見られたのはこの事です。大いなる神がこの後に起るべきことを、王に知らされたのです。その夢はまことであって、この解き明かしは確かです」（ダニエル 2:44, 45）

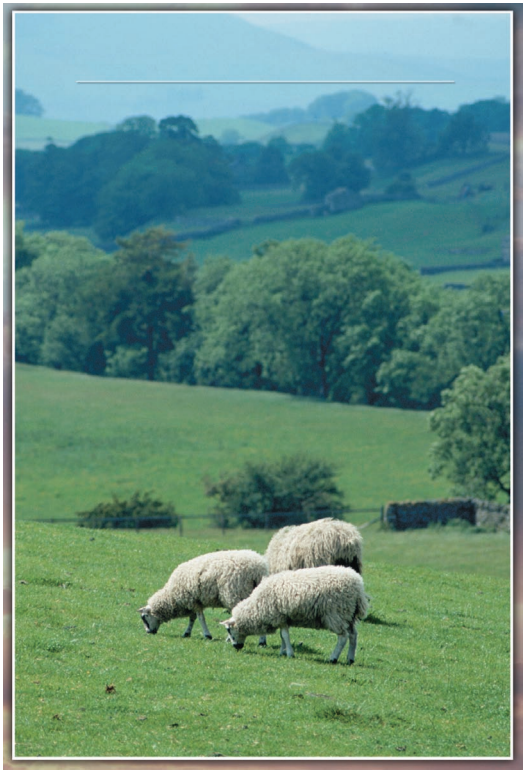
これが偉大な預言のクライマックスです。世界帝国によるドラマの最後の場面は、神の王国の建設です。これは確実なものなのです！先の象徴がみな正確に一連の歴史の中で成就したように、この最後の部分もまた実現することがわかります。ダニエルは次のように言いました、「その夢はまことであって、この解き明かしは確かです」。わたしたちは、聖書の預言が歴史的に成就してきたことを学び、それらの真実性を確認するように教えられています。「あなたがたは主の書をつまびらかにたずねて、これを読め。これらのものは一つも欠けることなく、また一つもその連れ合いを欠くものはない。これは主の口がこれを命じ、その霊が彼らを集められたからである」（イザヤ 34:16）。

キリストの御国が来るのは、鉄と粘土の最後の諸王国の時代においてです。キリストが再臨なさるのは、神の小羊としてではなく、王の王、力強い支配者としてです。その御国は人間の支援に依存してはいません。それは天の王国であり、人手によらずに切り出された石なのです。このお方の王国は、人間の王国とは異なり、とこしえに永続するのです。

イエスは、もうすぐ再臨されます。しかし、このお方はその前に、人々の心の中においてご自分の王国を建設しようとなさいます。親愛なる友人の皆さん、このお方が来られるときに、天の御国を継ぐことができるように、今みなさんは自分の心を平和の君に支配していただくでしょうか？

恐れるな、小さい群れよ

Fear Not, Little Flock



「世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであったように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの場となって下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。」(患難から栄光へ下巻 296)

11 月

11月1日

病んでいる器官を癒す

「舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか。」（ヤコブ 3:5）

教会員は各自、本気で決心して、助けを祈り求め、舌という病んだ器官を癒すために取り組もう。すべての人が、小さな相違や過ちを何も言わずに大目に見ることを、自分の義務であり特権であると感じるようにしよう。だれかが犯した小さな過ちを拡大しないで、その人の内にある良いところを考えなさい。これらの過ちを考え、話すたびに、それらは大きくなっていく。些細なことが大問題にされてしまう。その結果、悪感情が生じ、信頼がなくなるのである。（オーストラレーシア・連合総会記録 1903 年 4 月 15 日）

イエスを愛すると公言する者たちが、あまりにもしばしば互を信頼しないことによってこのお方を否定する。あまりにもしばしば、悪を待ち構え、行動を最悪な観点から考え、言葉を曲解し、誤って解釈する。多くの人々は他の人々の欠点について熱心に話すが、自分たちの欠点に悩むことはほとんどない。もし彼らが自分たちの声をもっぱら自分たち自身の罪を告白するために用いるならば、そのほうが良いのである。神はご自分の子らの道をご存じである。すべての言葉、すべての思い、すべての動機は、万事をご覧になるお方の目の前に明らかである。そうであれば、わたしたちの心の中でイエスに王位についていただくことによって、また他の人々のために自己を否定することによって、イエスを愛していることを示そう。結束の固い一つの家族として、調和して共に働こう。

わたしたちはすべての点をよく防御しなければならない。なぜならサタンが誘惑の働きに倦むことを知らないからである。あなたの言葉によく気をつけ、あなたに言葉を出させる心を守りなさい。忠実な歩哨としてあなた自身の不完全な品性の特徴を見張りなさい。それはあなたが兄弟にとってつまずきの石となるようなことは何もしないでいられるためである。あなたの足のために曲がった道や、命の道から兄弟の足をそらす道をつくってはならない。あらゆる人の真相が明るみに出る日が来ることを、すべての者が覚えていればよいのだが。そのとき、あなたの品性の汚点であった悲惨なしみや、あなたの船を難破させたつまずきの岩があらわになる。多くの者たちがそのとき、舌は小さな器官ではあるけれど、重大な害をもたらすことを悟る。永遠に失われた多くの者たちは、そのとき絶望して、自分たちの心に恨みをまき、自分たちの思いに疑いの思いを植えつけた者たちを非難の目で見るのである。

互いに遠ざかるクリスチャンのためには何の対策も用意されていない。わたしたちの一致と愛によってわたしたちは、キリストのご品性を現すべきである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1897 年 4 月 27 日）

11月2日

主なるお方に屈伏しなさい

「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであろう。罪人どもよ、手をきよめよ。二心の者どもよ、心を清くせよ。苦しめ、悲しめ、泣け。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えよ。主のみまえにへりくだれ。そうすれば、主は、あなたがたを高くして下さるであろう。」(ヤコブ4:8-10)

「罪人どもよ、手をきよめよ。二心の者どもよ、心を清くせよ」と述べている聖句は、何を指しているのだろうか(ヤコブ4:8)。それはある者たちが二心をもって神に仕えてきたということを指している。彼らはある程度は神を尊ぶが、自分たちの方をより尊重するのである。思うべき限度を越えて自分を高く評価してはならない。キリストのみ言葉とだれか有限な存在である人間の言葉が、あなたの心に同等の影響力を与えることがないようにしなさい。全心を神のみ言葉によって満たしなさい。それらはあなたの燃えるような渇きを癒す生ける水である。……キリストのみ言葉をわたしたちのうちに豊かに宿していながら、それと同時にわたしたちの思いを自分に集中させることはできない。……わたしたちは自分たちの魂を神に明け渡すところに達したいのである。そしてただ単に明け渡すのでは十分ではない。そうではなく、イエスによりすがり、このお方を自分たちの生涯に招じ入れ、そしてわたしたちの全精力を尽くしてこのお方のために働かなくてはならない。そしてわたしたちは生ける信仰によってみ約束をつかみ、次のように言いたいのである。神は、祝福はわたしのものであると仰せになった。わたしはそれをわがものとしなければならないし、またそれがわがものとなることを信じると。そしてキリストに思いをとめ続け、このお方をしっかりとつかみ、それと同時に自分自身をこのお方に明け渡すとき、わたしたちはキリストが入って来てくださるのを見出すのである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1887年7月12日)

神と富に兼ね仕えることを求める者は、不安と困難を見出すだけである。なぜなら二心の者はすべての行動に安定がないからである。あなたが目を神の栄光だけに向けるとき、主に仕えることは容易になり、天への道を歩むのも容易になる。全存在を神に捧げなければならない。なぜならわたしたちの尊い救い主が、二心を共有なさることは決してないからである。わたしたちの傾向と願望は、神の御霊の支配下になければならない。そのときわたしたちは、信仰のよき戦いを立派に戦うために力づけられる。わたしたちは日ごとに、隊長のご命令はなんであろうかと問わなければならない。(同上 1891年5月5日)

主は仰せになる。あなたの部屋に入り、沈思内省しなさい。真理と良心の声に耳を傾けなさい。密かな祈りほど自己についてはっきりとした見解を与えるものはない。隠れた事をご覧になり、すべてのことをご存知であるお方は、あなたの理解力を啓発し、あなたの嘆願に答えてくださる。怠ってはならない明白で単純な義務が、あなたの前に明らかにされる。あなた自身とあなたのすべての力を神の奉仕に差し出すためにこのお方と契約を結びなさい。(同上 1912年6月6日)

11月3日

許す心

「兄弟たちよ。互に不平を言い合ってはならない。さばきを受けるかも知れないから。見よ、さばき主が、すでに戸口に立っておられる。」(ヤコブ 5:9)

イエスに対する愛でわたしたちの心が溶かされていなければ、このお方がわたしたちのために十字架の言うに言われぬ苦悩を耐えられたということを信じることは不可能である。そしてもしわたしたちがこのお方を愛しているならば、わたしたちはこのお方を喜ばせ、このお方に従いたいと切望する。キリストの愛によって動かされた心は真剣に、「主よ、わたしに何をおさせになりたいのですか」と問うのである(使徒行伝 9:6 英語訳)。

親愛なる兄弟方、「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい」(コリント第二 13:5)。多くの者たちは、もちろん、わたしは信仰を持っています。わたしは真理のすべての点を信じます、と答える。しかし、あなたは自分が信じていることを実践しているだろうか。あなたは、神とまた兄弟たちと平和を保っているだろうか。あなたは誠実に「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」と祈ることができるだろうか(マタイ 6:12)。それとも、あなたは自分の兄弟が自分を傷つけたと思うので、彼と仲たがいしているだろうか。あなた方の間で心が立腹していないだろうか。あなた方の心のうちには、あなた方の兄弟に対する敵意、妬み、嫉み、邪推、判断の誤りはないだろうか。競争、特別な好意や栄誉への願望、最高位を得たいという願いがないだろうか。これらの感情はクリスチャンの間で存在するべきではない。

わたしたちのために死なれたイエスは、計り知れない愛でわたしたちを愛される。だからわたしたちは互いに愛し合わなければならない。わたしたちはすべての利己心を捨て去り、愛と一致のうちに共に働かなければならない。わたしたちは自分自身を愛し、可愛がり、わがままな自分を許した。しかしわたしたちは、自分ほど欠陥がないかもしれない自分の兄弟に対して無慈悲であった。主はわたしたちが御自分に対して恩知らずで、御自分の憐れみを忘れがちで、ひどく疑い深いにもかかわらず、わたしたちを愛し、わたしたちを忍んでくださる。しかし兄弟方、キリストがわたしたちを愛されたように、わたしたちが愛さなければならないときに、わたしたちがどれほど互いに対して厳しく、どんなに無慈悲であるか、どんなに互いに感情を害し、傷つけ合うかを考えて見なさい。徹底的な改革をしよう。愛という尊い植物を養い、互いに助け合うことを喜びとしよう。わたしたちは親切にまた寛容であって、互いの誤りに対して辛抱強くならなければならない。わたしたちは鋭い批判は自分自身のためにとっておき、わたしたちの兄弟についてはすべてに希望を持たなければならない。

あなた方のある者たちは、熱心に罪の許し、神にある自由を求めているように見える。あなたは自分が求めている許しに値するだろうか。いいえ、あなたはそれには値しない。神は喜んでそれをただでお与えになる。そうであるのにあなたはあえて自分の兄弟から、彼らがそれには値しないとあなたが考えている許しと愛情を差し控えるのであろうか。あなたは神がそのように自分を扱われることを願うのだろうか。(聖書訓練学校 1912 年 8 月 1 日)

告白と祈り

「だから、互に罪を告白し合い、また、いやされるようにお互のために祈りなさい。義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである。」（ヤコブ 5:16）

この世の知恵は祈りが必要ではないと教える。祈りに対する真の応答などはないと、科学者たちは主張する。そんなことは、法則に反することであって、奇跡である、そして奇跡などはないというのである。宇宙は一定の法則に支配されていて、神ご自身、そうした法則に反することは何事もなさらないと言うのである。このようにして、神はご自身の法則に縛られていて、その法則を自由に支配することがおできにならないかのように彼らは断言する。このような教えは、聖書の証言に反している。キリストとその弟子たちによって、奇跡が行なわれなかったであろうか。その同じあわれみ深い救い主が、今日も生きておられて、ご在世のころと同様に信仰の祈りに喜んで耳を傾けてくださるのである。自然は超自然と協力する。われわれがこのようにして求めなければ与えられないものが、信仰の祈りにこたえて、われわれにさずけられることが、神のご計画の一部である。（各時代の大争闘下巻 269, 270）

今必要とされている祈りは、発作的で不確かな、海の波のように揺れ動く祈りではなく、熱心で、不屈の絶え間ない祈りである。もし数人の者たちが、滅びゆく魂に対する重荷を心に負って、一致して互いに集まり、熱心で熱烈な祈りを捧げるならば、その祈りに効果のあることがはっきりと立証される。兄弟方、わたしたちの正当な場所はまさに神の足元であるから、もっと信仰のうちに、子供のような単純さのうちに祈ろうではないか。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1892 年 8 月 23 日）

あまりにも多くの場合、わたしたちの祈りはわたしたちの心の誇りによって、わたしたちが過ちを告白し、間違った印象を取り除くことを拒むことによって妨げられる。同労者がわたしたちを誤解するがままにしておく間は、わたしたちの祈りは神に受け入れられないということを覚えていよう。現にある誤解に対してわたしたちに責任がないのであれば、おそらく、誤解を取り除くために説明をすることができるだろう。もしわたしたちに責任があり、兄弟の思いに間違った印象を残しているなら、確かにわたしたちはこの印象を取り除くためにできる限りのことをしなければならない。（同上 1904 年 7 月 21 日）

大いに力があり、効果のある祈りは天において注目される。このお方の霊のあらゆる尊い賜物をつかむために、神から力を得ることはクリスチャンの特権である。神の力は減少していない。このお方の恵みとこのお方の霊は、かつて与えられていたように、今も惜しみなく与えられる。「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と叫びつつ（創世記 32:26）、ヤコブが主張したような信仰と格闘したような精力を失ったのは、神の教会である。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1886 年 11 月 18 日）

11月5日

神のためのエリヤの熱心

「エリヤは、わたしたちと同じ人間であったが、雨が降らないようにと祈をささげたところ、三年六か月のあいだ、地上に雨が降らなかった。」（ヤコブ 5:17）

イスラエルにおいて神への畏れは日に日に減っていた。盲目的偶像崇拝という彼らの不敬なしるしが、神のイスラエルのただなかで見られるようになった。だれ一人として、広く行き渡っていた不敬な偶像崇拝に反対して公然と立つことによって、自分たちの生活をあえて危険にさらそうとはしなかった。バアルの祭壇と、太陽と月と星に犠牲を捧げるバアルの預言者たちは、いたるところで人目を引いていた。彼らは宮と森林を聖別し、そこに人の手によって作られたものが崇拝されるために置かれた。神がこの民のためにお与えになった恩恵は、彼らから与え主に対して何の感謝も呼び起こさなかった。天のすべての恵み深さ、すなわち流れる小川や生ける水の流れや穏やかに下る露、また地を活気づけ、畑が豊かに実を実らせるようにする大雨などを、彼らは自分たちの神々の恩恵によるものとみなした。

エリヤの忠実な魂は深く悲しんだ。彼の義憤がわきおこった。そして彼は神の栄光のために熱心であった。彼はイスラエルが恐るべき背信に陥っているのを見た。そして彼は、神が彼らのためになされた大いなる事を思い起こしたとき、悲しみと驚きで圧倒された。しかし民の大多数はこのことをすべて忘れていた。彼は魂が苦悩にかきむしられるような思いで主の御前に出て、たとえ裁きによらねばならないとしても、ご自分の民を救ってくださるようにとこのお方に嘆願した。彼はご自分の恩知らずの民から露と雨、すなわち天の宝を差し止め、それによって背教したイスラエルが自分たちの神々、すなわち金や木や石、太陽や月や星の神々に、地を潤し豊かにさせ、地が豊かに実をもたらすようにとむなしく求めるようにと嘆願した。主はエリヤに彼の祈りが聞かれ、ご自分の民が悔い改めてご自分のもとに立ち返るまでは、彼らから露と雨を差し止められることを告げられた。（教会への証 3 巻 262, 263）

天は義人の熱心な祈りに対して閉じられてはいない。エリヤはわたしたちと同じ人間であったが、主は聞かれて、最も顕著な方法をもって彼の嘆願に応えてくださった。わたしたちが神と格闘する力に欠けている唯一の理由は、わたしたち自身のうちに見出される。もし真理を公言する多くの者の内面生活が、彼らの前に提示されるならば、彼らはクリスチャンだと主張しなくなるであろう。彼らは恵みに成長していない。性急な祈りがときどき捧げられるが、そこには、神との真の交わりがない。神に捧げた生活において、もっと前進したいのであれば、わたしたちはもっと祈らなければならない。（同上 5 巻 161）

11月6日

なぜ7回か

「〔エリヤが〕ふたたび祈ったところ、天は雨を降らせ、地はその実をみのらせた。」(ヤコブ5:18)

バアルの預言者たちが滅ぼされた後、エリヤはアハブに言った、「大雨の音がするから、上って行って、食い飲みしなさい」(列王記上18:41)。王が去った後、エリヤはカルメル山の頂に登り、「地に伏して顔をひざの間に入れ」た(42節)。彼がアハブに上っていって、食い飲みしなさいと命じたとき、彼は雨がすぐに降ってくるという証拠を持っていただろうか。彼は天に雲を見たであろうか。彼は雨を見ただろうか、それとも雷の音を聞いただろうか。いいえ。彼は、主の霊が彼の思いを動かして、彼の祈りが聞かれるということを信じるように導いたので、これらの言葉を語ったのである。彼は自分の信仰を明らかにするためになし得る限りのことをなし、今、雨を豊かに溢れるばかりに降らして下さるように祈り始めた。……

エリヤが祈っている間、しもべは見張っていた。しもべは6回戻ってきて、雲も雨の降るしるしもありませんと言った。しかし、預言者は落胆してあきらめることをしなかった。彼は、神に栄光を帰すことに失敗した点を調べるために、自分の生涯を再吟味し続け、自分の罪を告白した。こうして彼は祈りが答えられたしるしを待つ間、神の御前に自分の魂を悩まし続けた。彼が自分の心を探ったとき、自分自身の評価も神の御前においても、ますます自分が小さく思えた。彼にとって自分が無であり、神がすべてであると思えた。そして彼が自己放棄の地点にまで達し、また自分の唯一の力と義として救い主にすがりついたときに返答がきた。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1891年5月26日)

〔神〕は、わたしたちがすべての関心を、神の関心と織り合わせることを望まれる。そうする時に、神はわたしたちを安心して祝福なさることができる。なぜなら、祝福がわたしたちのものとなる時、わたしたちは自分たちの栄誉としないで、神にあらゆる賞賛を帰すようになるからである。神は、いつもわたしたちの祈りに最初から答えられるとは限らない。もしそうなさったら、わたしたちは神がお与えになるあらゆる祝福と恩恵を受ける権利を、当然のことと思うからである。自分が何かの悪をもてあそび、罪にふけっていないかどうかを吟味するために心を探ることをしないで、不注意になり、神に信頼することと、神の助けの必要性を悟ることに失敗するからである。

エリヤは、自分に栄誉を帰すことがないという状態にまでへりくだった。これが、主が祈りを聞かれる状態である。なぜなら、その時わたしたちは主を褒めたたえるからである。(同上1891年6月9日)

11月7日

天へ向かうはしごを上る

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである。あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、信仰により神の御力に守られているのである。」（ペテロ第一 1:3-5）

わたしたちは世の称賛を求めて生きているのではない。そうではなく、わたしたちは将来、すなわち不朽の嗣業のために生きているのである。わたしたちは神の相続人であり、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産のイエス・キリストとの共同相続人なのである。悲しみがあなたの魂を捕らえるとき、あなたが迫害され悩まされるとき、あなたの頭をもたげなさい。あなたの救いが近づいているからである。あなたは神の命で計られる命を持つべきである。あなたは世の標準に合うことを求めるべきではなく、戒めを守る者、王家の一員、天の王の子供であって、永遠の富を喜ぶことを求めるべきである。

天へ向かう進歩のはしごを上りなさい。キリストがはしごであって、そのはしごの基礎は地上にあり、その一番高い段は最高の天に達している。神がはしごの上におられ、このお方の栄光がはしごの一段一段を照らしている。あなたはキリストにしっかりとつかまりながら上らなければならない。そしてついにはこのお方の永遠の王国に達するのである。（ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｴｺｰ 1894 年 10 月 8 日）

だれ一人として敵に打ち勝つのは容易なことであり、自分の側の努力なしに朽ちることのない嗣業まで空高く持ち上げられることができると想像することがないようにしよう。後ろを振り返ると目がくらむ。つかんでいる手を離すことは、滅びることである。勝利するために絶えず努力する重要性を、正しく認識する者は少ない。彼らは自分たちの骨折りの力を緩め、その結果利己的になりわがままになる。霊的警戒は必要不可欠なものであるとは考えられていない。人間の努力における熱心さが、クリスチャンの生涯に持ち込まれていない。

自分たちは真理を持っているから、堅く立っていると考えてはいるが、その真理をイエスのうちにあるがままの真理として持っていない人々は、悲惨な堕落を経験するようになる。一瞬の不注意が、魂を取り返しのつかない破滅に陥れる。一つの罪が二度目の罪へと導き、二度目の罪が三度目の罪へ道を備え、そのように他の罪がそれに続くのである。わたしたちは神の忠実な使命者として、神の力によって守られるようにと絶え間なくこのお方に嘆願しなければならない。もしわたしたちが義務からたった一センチでさえそれるなら、わたしたちは破滅に終わる罪の進路を追い続ける危険の中にいるのである。わたしたち一人ひとりに希望があるが、それはただ一つの方法によってである。それは自分自身をキリストに結びつけ、このお方の品性の完全さに到達するために全精力を用いることによってである。（教会への証 5 巻 539, 540）

金よりも尊い信仰

「そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試錬で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変るであろう。あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである。」（ペテロ第一 1:6-9）

この試練のときに、われわれはお互いに励まし慰め合う必要がある。今、サタンの誘惑はこれまでになかったほどに激しい。というのは、サタンは自分の時が短く、間もなくすべての者の運命が生か死かに決定されることを知っているからである。今は失望と試練に打ちひしがれるときではない。……われわれのすべての試練に対して、〔主の〕恵みは十分である……。そして試練は、これまでにないほど大きいけれども、もしわれわれが全く神に信頼するならば、われわれはすべての誘惑に打ち勝ち、彼の恵みによって勝利することができるのである。

もしわれわれが試練に打ち勝ち、サタンの誘惑に勝利するならば、われわれは金よりもはるかに尊い信仰の試練に耐え、さらに強くなり、次の試練に当面する準備がよくできる。しかし、もしわれわれが、サタンの誘惑に圧倒されて負けるならば、われわれは弱くなり試練の報賞も受けず、次の誘惑に対する準備もよくできないのである。こうして、われわれは徐々に弱くなり、ついにサタンの思いのままに捕虜にされてしまう。われわれは神の武具をすべて身につけて、いつでも暗黒の勢力と戦う用意がなければならない。誘惑や試練が襲ってくるときに、神のところへ行き、熱心に神に祈り求めよう。神は、われわれに何も与えずに去らせることをせず、われわれに、勝利するための、そして敵の力を打ち破るための、恵みと力とをお与えになる。……

神は神の民を清め精練するために、彼らに苦い杯を飲ませられる……。それは苦い杯である。そして、不平不満呟きによって、それをさらに苦くすることができる。しかし、このようにしてそれを受ける人々は、もう一つの杯を飲まなければならない。なぜならば、最初のものが、心にその意図された効果をあらわさなかったからである。もし二度目の杯が効果をあらわさなければ、その効果があらわれるまで、彼らはまたその次も、そしてまたその次の杯も、飲まなければならない。さもなければ彼らは、その心が汚れたまま放置される。この苦い杯は、忍耐、辛抱強さ、祈りによって甘くすることができ、それをこうして受ける人々の心に、その意図された効果をあらわし、神に栄光と誉れとが帰せられることをわたしは見た。（初代文集 111-113）

11月9日

恵みのうちに成長する秘訣

「それだから、心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現れる時に与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望んでいなさい。従順な子供として、無知であった時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである。」（ペテロ第一 1:13-16）

目覚めている間、思いは絶えず働いている。もし思いが重要ではない事柄から離れないなら、知性は成長を妨げられ、弱くなる。発作的な考えがひらめくかもしれないが、しかし、思いはしっかりとした、真面目な考察をするようにとは訓練されない。真剣な熟考を要するテーマがある。それらは、まもなく完成する贖いの偉大な計画と関連したことである。イエスはまさに天の雲に乗って現れようとしておられる。わたしたちがその日に立つことができるためには、どのような品性を持っていなければならないのであろうか。永遠の関心事であるこれらのテーマを深く考えることによって思いは強められ、品性は発達する。ここにヨセフが持っていた、しっかりとした確固たる原則の基礎がある。ここに恵みと真理の知識のうちに成長する秘訣がある。……

神の子はキリストの義を着せられ、このお方の生命を与える力によって支えられるまでは満足しない。彼が自分の品性のうちに弱さを見るとき、それを繰り返し告白するだけでは十分ではない。そうではなく、品性の正反対の特性を培うことによって自分の欠点に打ち勝つ決心と活動力をもって、働かなくてはならない。彼はこの働きは難しいからといって避けることをしない。クリスチャンにはたゆまない活動力が要求されている。しかし自分の力で働くことを強いられてはいない。神の力が彼の求めを待ち受けている。自己に打ち勝つために、誠実に努力している者はみな「わたしの恵みはあなたに対して十分である」（コリント第二 12:9）という約束を自分のものとする。

信仰の祈りと結びついた個人的努力を通して、魂は訓練される。品性は日毎に、キリストに似た者に成長し、ついには周囲の状況にもてあそばれる代わりに、利己心をほしいままにし、軽々しいつまらない会話に夢中になる代わりに、人は自分の思いと言葉を支配する者となる。長い間ふけっていた習慣に打ち勝つには、厳しい戦いを要するかもしれないが、わたしたちはキリストの恵みを通して、勝利できる。このお方はご自分に学ぶようにとわたしたちを招いておられる。キリストは、わたしたちが自制を実践し、品性において完全な者となり、ご自分のみまえに喜ばれることを行うことを望まれる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1884 年 6 月 10 日）

11月10日

神のみ旨を知る

「だから、あらゆる悪意、あらゆる偽り、偽善、そねみ、いっさいの悪口を捨てて、今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救に入るようになるためである。あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知ったはずである。」（ペテロ第一 2:1-3）

聖霊は人が何らかの行動方針をとるようにと強要なさらない。わたしたちは自由な道徳的器である。そしてわたしたちの義務に関して十分な証拠が与えられたとき、わたしたちは自分たちの方針を決定するがままに任されているのである。……

天からの光と真理を求めて祈るあなたは、聖書を学んできただろうか。それによっておい育つようになるために、混じりけのないみ言葉の乳を慕い求めてきただろうか。あなたは示された命令に自分を従わせているだろうか。しなければならないと、してはならないは、明確な要求であり、クリスチャンの生涯において怠ける余地はない。自分の霊的欠乏を嘆いているあなたは、神の御心を知り、それを行うことを求めているだろうか。あなたは狭い門から入る努力をしているだろうか。主なるお方のためになすべき働き、真剣な働きがある。神のみ言葉の中で責められている悪は、克服されなければならない。あなたは個人的に世と肉と悪魔に対して戦わなければならない。神のみ言葉は、「御霊の剣」と呼ばれており、もしあなたが妨害と暗闇の軍勢を切り抜けたいのなら、あなたはそれを巧みに用いる者とならなければならない。

有害な交際から自分自身を引き離しなさい。イエスに従うための犠牲を考慮し、自分自身を肉と霊とのいっさいの汚れから清めるという確固とした目的を持ってそれをしなさい。永遠の生命はあなたのすべてに価するものであり、イエスは「それと同じように、あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」と仰せられた（ルカ 14:33）。何もしないで、ただ何か超自然的な手段によって強要されるまで待つ者は、無気力と暗黒のうちに待つのである。神はご自分のみ言葉を与えておられる。神は間違うことのできない言葉であなたの魂に語られる。このお方の御口からでるみ言葉は、あなたの義務をあなたに示し、それを成就するようにと促すために十分ではないだろうか。

神の御心を知り、それを行うために、へりくだって祈りながらみ言葉を調べる者たちは、神への自分たちの義務について疑うことはない。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネ 7:17）。もしあなたが信心の奥義を知りたいと願うなら、あなたは真理の明白な言葉に従わなければならない。すなわち、気持ちがあろうとなかろうと、感情があろうとなかろうとそれに従わなければならない。従順は原則という観点からなされなければならない。そして正しいことがあらゆる状況の下にあって遂行されなければならない。これが神によって選ばれ、救いにいたる品性である。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1888 年 7 月 17 日）

11月11日

わたしたちの魂の敵から逃れる

「愛する者たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたは、この世の旅人であり寄留者であるから、たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい。」（ペテロ第一2:11）

神の言葉は、罪深い満足によって機能が麻痺させられた者に、ほんの弱々しい印象しか与えない。健康と生命を犠牲にしてまで動物的食欲と激情がほしいままにされている間は、心は神への献身を保つことができない。パウロは、コリント人に次のように書いている。「肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなろうではないか」（コリント第二 7:1）。

〔しかし〕利益や流行を追ってその能力を弱めている自称キリスト者たちが、なんと多いことであろう。また、暴食、飲酒、放蕩などによって、神のかたちである人性を堕落させている者が、なんと多いことであろう。しかも教会は、これを譴責するどころか、かえって食欲に訴え、物欲や快楽を愛する心に訴えることによって、こうした害悪を助長し、キリストに対する愛が弱いために供給できない教会資金を、補充しようとするのである。もしキリストが、今日の教会に入ってこられ、宗教の名のもとに行なわれている飲食と汚れた取引をご覧になるなら、昔、神殿から両替人たちを追い出されたように、これらの神を汚す人々をも追い出されないであろうか。（預言の霊 4 巻 302, 303）

世界はすっかり放縦に陥っている。「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」が大多数の人々を支配している。しかし、キリストの弟子たちは、より聖なる召しを受けている。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない」（コリント第二 6:17）。神の言葉に照らしてみても、邪悪な習慣や世俗の欲望の満足を全く放棄しない清めは真実のものでないという、われわれの主張は正しい。（各時代の大争闘下巻 205）

すべてのゆがめられた食欲は、戦いをいどむ肉の欲となる。体力を損傷するまでほしいままにされた食欲は、魂の病を招く。使徒が言及している肉欲は第七条の戒めの違反だけに限られているのではなく、体の活力を弱めるすべての味覚をほしいままにすることが戦いをいどむ肉の欲なのである。特別な勝利を得たいと願い、義におけるより高い達成を願う者は、「何ごとにも節制」しなければならないと、使徒は宣言している（コリント第一 9:25）。もしわたしたちが、キリストが勝利されたように勝利したいのならば、他のすべての点において節制を実践することのみならず、食卓においての飲食行動においての節制が必要不可欠である。神はわたしたちに光を与えられたが、それは無頓着に扱われるためではなく、わたしたちの導き、また助けとなるために与えられたのである。（教会への証 4 巻 215）

国家の権威への敬意

「あなたがたは、すべて人の立てた制度に、主のゆえに従いなさい。主権者としての王であろうと、あるいは、悪を行う者を罰し善を行う者を賞するために、王からつかわされた長官であろうと、これに従いなさい。善を行うことによって、愚かな人々の無知な発言を封じるのは、神の御旨なのである。自由人にふさわしく行動しなさい。ただし、自由をば悪を行う口実として用いず、神の僕にふさわしく行動しなさい。すべての人をうやまい、兄弟たちを愛し、神をおそれ、王を尊びなさい。」（ペテロ第一 2:13-17）

政府の統治者によってなされていることを常に非難することは賢明ではない。個人または制度を攻撃することは、わたしたちのなすべきことではない。わたしたちは国家の権威に対して反対していると思われないように、十分気をつけなければならない。たしかにわたしたちの戦いは積極果敢（かかん）なものであるが、わたしたちの武器は明白な主はこう言われる、という言葉のうちに見出されるものでなければならない。わたしたちの働きは、神の大いなる日に立つことができるように人々を準備させることである。わたしたちは論争を奨励したり、わたしたちの信仰を持っていない者の内に敵意を起こしたりする方向へとそれてはならない。

わたしたちは、反逆を支持しているように思われる者として注目される方法で働いてはならない。わたしたちは自分たちの文書や発言の中から、それだけで取り上げられると、法律や命令に対立しているかのように誤って伝えられるかもしれないすべての表現を取り除くべきである。わたしたしたちが自分たちの国と国の法律に不忠を働きかけている者として記録されるようにすることがないように、すべてが注意深く考慮されるべきである。わたしたちは権威に反抗するようには要求されていない。（教会への証 6 巻 394）

わたしたちは主の旗を広げ、このお方のみ言葉を擁護しながら、主の御名のうちに前進するべきである。権威者たちがわたしたちにこの働きをしないように命令するとき、彼らが神の戒めとイエスの信仰を宣布することをわたしたちに禁止するとき、その時こそわたしたちは使徒たちのように、「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」（使徒行伝 4:19, 20）と言う必要がある。（同上 395）

霊的成功は、キリストの学校で柔和と謙遜を学んだ者にのみやってくる。わたしたちは世がわたしたちを外見によって判断することを覚えるべきである。キリストを代表することを求めている者たちが、品性の矛盾した特性を見せることがないように注意深くさせなさい。……権威と政府を糾弾する問題は、すべて神ご自身の管理に任せなさい。柔和と愛のうちに忠実な歩哨として、イエスの内にあるがままの真理の原則を擁護しようではないか。（同上 397）

11月13日

侮辱に対する免疫

「僕たる者よ。心からのおそれをもって、主人に仕えなさい。善良で寛容な主人だけにでなく、気むずかしい主人にも、そうしなさい。もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を耐え忍ぶなら、それはよみせられることである。悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。」（ペテロ第一 2:18-20）

復讐をしてはならない。できる限り、あらゆる誤解の原因を取り除き、悪い外見を避けなさい。原則を犠牲にしないかぎり、全力を尽して人と融和しなさい。（ﾐﾆｽﾄﾘｰ・ｵﾌﾞ・ﾋｰﾘﾝｸﾞ 470）

わたしたちに対する実際上または仮定上の不正行為のために自分の精神をいらだたせるわけにはいかない。自我はわたしたちの最も恐るべき敵であって、どういう形の悪も、聖霊に制せられていない人間の情欲に比べると、それほど有害な影響を品性に及ぼさないのである。また勝つことができた他のどんな勝利に比べても、自己に打ち勝つ勝利ほど尊いものはない。

感情をたやすく害してはならない。わたしたちは自分の気持や名声を守るために生きるのではなく、魂を救うために生きなければならない。人を救うことに熱心になれば、相互の間によく起るわずかな意見の相違に気を留めなくなる。（同上 469）

クリスチャンは試され試みられる。しかしもし彼らが神に真剣に仕えようとするなら、すべての闘争のために力が与えられる。彼らは自分たちの耳に入ってくる偽りの噂に、耳を傾けるべきではない。それより、義務の道をまっすぐ進むべきである。彼らは自分自身で考えることを学ばなければならない。そして彼らの行動は常に神のみ言葉に基づいていなければならない。

わざわざあなたの敵に説明を求めてはならない。彼の非難と悪意の言葉は、あおられなければ自然に消滅する火花のようなものである。地獄の火を放つ舌を持つ者たちの悪い噂を忘れ去りなさい。もしあなたが論争するために立ち止まるならば、あなたはただ、さらに弊害を来たすだけである。多くの場合、困難は沈黙によって癒される。悪を語る者をそのままにしておきなさい。果たすべき聖なる信任を持つ者として、自分の仕事に取り掛かりなさい。あなたが批判されるとき、聞かない者であるかのように進みなさい。あなたの心は傷つけられるかもしれないが、それでもなお、あなたは自分の働きからそらされることを許してはならない。永遠の関心事にあなたの時間と注目を与えなさい。（ｾﾝﾄﾗﾙ・ｱﾄﾞﾊﾞﾝｽ 1903 年 4 月 8 日）

挑発の下での柔和

「あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。」（ペテロ第一 2:21-23）

御父と一つであられたお方が、天の栄光ある御座から降りて来られ、ご自分の王衣と王冠を脇に置いて、ご自分の神性を人性で覆われ、そうすることによって人のかよわい能力の水準にまでご自分を低くされた。……世を改革するよりは、その存在を砕き去るほうがはるかにたやすかったであろう。しかしキリストは、「人の子は人の命を滅ぼすためではなく、これを救うために来たのである」と仰せになる（ルカ 9:56 英語訳）。神の御子は絶望的な状況を理解され、人がご自分を通して永遠の生命を持つことができるように、わたしたちの世に来られた。このお方はいと高き者の御子であられたが、人を愛し、破滅から救いたいと思われたので、侮辱と嘲笑と残酷な死に甘んじられた。しかしこのお方が救われるために来られた世は、自分を天とのすべての交わりから閉め出すことを決心したかのように、神の憐れみをあざけり、全能の神を拒むかのように、栄光の主を十字架につけた。わたしの親愛なる兄弟姉妹方、わたしたちはそのような愛、そのような無限の犠牲を動じることなく眺めることができるだろうか。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1888 年 12 月 11 日）

神の御子は邪悪な世界を救うために、ご自分の上に人の性質をとられ、侮辱と屈辱と恥と死をしのばれた。このお方はわたしたちと同じようにすべての点において誘惑を受けた。それはご自分がわたしたちの誘惑を良くわかるようになるためであり、この苦しみと試練の経験により、このお方はアダムの息子娘が神への忠誠に帰り、神のパラダイスの中央にある命の木に戻ることができるように道を開かれた。わたしたちと同じようにすべての点において試みられたそのイエスは、ご自分のもとに来て、彼らのすべての悲しみを注ぎだすことへの確信を人に与えられた。なぜなら、このお方はわたしたちの悲しみを負い、わたしたちの弱さを思いやるお方だからである。わたしたちは自分たちの主のご生涯と品性を学び、このお方の柔和と心のへりくだりを学ぶべきである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1890 年 7 月 28 日）

柔和の定義を求められたときある女子生徒は、柔和な人々は乱暴な質問に穏やかな答えをなす人々であると言った。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1904 年 4 月 7 日）

わたしたちは世に理解されてはおらず、また今後も決して理解されることがない。しかしこのために落胆してはならない。わたしたちは現在の状況を見るべきではなく、またわたしたちが誤って判断されたとき怒るべきではない。そうではなく、わたしたちはよいことをするすべての機会を活用するべきである。（同上 1894 年 7 月 22 日）

11月15日

このお方は耳をかたむけてくださる

「主の目は義人たちに注がれ、主の耳は彼らの祈にかたむく。しかし主の御顔は、悪を行う者に対して向かう。」（ペテロ第一 3:12）

誘惑されている魂よ、主にむかって叫びなさい。無力で無価値なあなた自身を、イエスの前に投げ出して、その御約束にすがりなさい。そのとき、主は、耳をかたむけてくださる。主は、人間の生れつきの心の性癖がどんなに強いかを知っておられて、誘惑を受けるたびに、助けてくださる。

あなたは、罪に陥ってしまっただろうか。もしそうなら、今すぐ神にあわれみと許しを求めなさい。ダビデが自分の罪を自覚したとき、彼は神の御前で悔い改めとへりくだりのうちに自分の魂を注ぎだした。彼は自分の冠を失うことには耐えられても、神の恩恵が奪われることには耐えられないと感じた。いまでも罪人にそのあわれみはさしのべられている。主は、わたしたちがさまよいつづけている間中、「背信の子どもたちよ、帰れ。わたしはあなたがたの背信をいやす」と、呼びかけておられる（エレミヤ 3:22）。もしわたしたちがこのお方の御霊の嘆願する声に注意を傾けるならば、神の祝福はわたしたちのものとなることができる。「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる」（詩篇 103:13）。（教会への証 7 巻 177）

わたしたちの信仰は、神が真剣に求めるすべての者の祈りを聞き、答えてくださるという、栄光に満ちた事実をつかまなければならない。信者が神の御前に嘆願してひざまずき、へりくだって悔恨のうちに偽りのない唇から嘆願を差し出し、新しい戒めの仲保者に自分の目をしっかりと留めつづけるとき、彼は自分について考えることがまったくなくなる。彼の思いはキリストのような品性を築き上げるために持たなければならない考えによって満たされる。彼は、主よ、わたしがあなたの愛の日々刻々流れる通路となるべきなら、わたしは信仰によってあなたが約束された恵みと力を求めますと祈る。……

この依存はどんなに主なるお方を喜ばせることであろう。この確固とした真剣な嘆願を聞くことをどんなにうれしく思われることであろう。真剣で熱心な祈りはなんと早く認識され尊重されることであろう。天の御使いたちはどれほど熱心に関心を示していることであろう。「御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか」（ヘブル 1:14）。主は驚くべき恵みと気高くする恵みをもって、へりくだった嘆願者を聖別され、最も難しい義務を行うための力を与えられる。引き受けたことはすべて主に対してなされ、このことが最もいやしい召しを高尚にし、聖別するのである。それは一つ一つの言葉、一つ一つの行動に新しい気高さを与え、最もへりくだった働き人、すなわち神の僕の最もまずしい者を、天の宮廷にいる最も高い地位の天使たちとつながらせる。……

このお方はわたしたちを勝利者とならせることのできる力を備えておられる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1903 年 1 月 27 日）

11月16日

いつでも証をする用意ができている

「心の中でキリストを主とあがめなさい。また、あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明のできる用意をしていなさい。」（ペテロ第一 3:15）

神はすべての信者が、魂を勝ち取る者となることを望まれる。そしてこのお方は、確信を持って知恵と導きを求めてこのお方を仰ぐすべての者を祝福される。彼らが知恵の道を歩み、イスラエルの主なる神への忠誠にとどまって慎重に進むとき、生活習慣に明らかにされたキリストの純潔と単純さは、真の敬虔を持っていることを証言する。彼らが言うこと行うことすべてにおいて、彼らは自分たちが仕えているお方のみ名に栄光を帰すのである。

真の伝道精神を吹き込まれている信者は生きた手紙であり、すべての者に知られ、読まれている。真理は偽りのない言葉によって彼の唇から出て行く。彼の敬虔と熱心と聖別された判断は日々成長し、不信心な世は、彼が神との生きた交わりのうちにおり、このお方に学ぶ者であることを見るのである。改心した者の唇によって語られた言葉には、未信者の冷たい心に触れる力が伴う。なぜなら神を知らない者でさえ、人性と神性を見分けることができるからである。（教会役員広報 1914 年 9 月 1 日）

あなたがたのうちにある望みについて説明を求める者には、柔和と恐れを持って弁明するべきである。しかしどんな恐れを感じるべきであろうか。自己が現れないように、自尊心と優位性の感情があなたの証に混じることがないようにという、聖なる恐れである。なぜならもしあなたが正しくキリストを代表したいのなら、自己はイエスのうちに隠されなければならないからである。

あなたのクリスチャン経験を話すにあたって、あなたは自己を高めるべきではなく、暗闇から驚くべきみ光に招き入れてくださった方の誉れを示すべきである。キリストの奉仕に加わった者たちが謙虚さによって覆われ、主なるお方のうちにある信仰を通して、また親切と愛のうちに魂をキリストに近づけるために、自分にできる限りのことをすべてするようにさせなさい。あなたは主を知らない人々のそばを無関心に素通りすることはできない。あなたは神との共労者でなければならない。あなたが宣教の働きにおいて働けば働くほど、適正をもっと表す。なぜならあなたは上からの知恵の必要を感じる状況に至らせられるからである。また、特別な場合に遭遇することによって、誘惑の下にあり、敵の提案に従うことによって神から離れた魂のために働くための資格を与える貴重な知識を、あなたは得るからである。キリストに従うすべての者が、キリストのすぐかたわらに身を寄せる必要がある。（ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1892 年 11 月 10 日）

11月17日

試練はわたしたちの信仰を強める

「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試錬を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである。」(ペテロ第一 4:12, 13)

〔イエス〕はご自分の愛する者たちに、誘惑や試練や苦悩がやってくることをお許しになる。それらは、彼らがご自分のそばからはぐれるときに彼らを元に連れ帰り、彼らにご自分の臨在と摂理的な配慮のさらに深い自覚を与えるための、このお方のみ摂理、憐れみの訪れである。……信仰は争闘と苦しみを通して成長しなければならない。わたしたちは個人的に苦しみ、強くなることを学ばなければならない。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1884 年 8 月 12 日)

試練や困難は神がお選びになった鍛練の手段であって、神が定められた成功の条件である。……わたしたちが試練に耐えるように召されている事実は、主イエスがわたしたちの中に発達させようとお望みになっている、尊いものがその中にあることを、主が認められていることを示している。(ﾐﾆｽﾄﾘｰ・ｵﾌﾞ・ﾋｰﾘﾝｸﾞ 454, 455)

神への十分で完全な献身がわたしたちに求められている。罪深い死すべき者の贖い主が、わたしたちのために働き苦しまれている間、このお方はご自分を否定された。このお方の全生涯は労苦と困窮の場面のうち続く生涯であった。ご自分が選びさえすれば、地上における日々を安楽と豊かさのうちに過ごし、この世のすべての快楽と楽しみをご自分のものにすることができたのであった。しかしこのお方はそうなさらなかった。このお方はご自分の便宜を考慮されなかった。このお方はご自分を喜ばせるためではなく、良いことをし、他の者たちを苦しみから救うため、助けを最も必要としている者たちを助けるために生きられた。このお方は最後まで耐え忍ばれた。彼はみずから懲らしめをうけて、わたしたちに平安を与え、わたしたちすべての者の不義を負われた。苦い杯はわたしたちが飲むべき分であった。わたしたちの罪がそれを調合したのである。しかし、わたしたちの愛する救い主は、わたしたちの唇からその杯を取って、御自身で飲まれた。そして、その代わりにこのお方はわたしたちに憐れみと祝福と救いの杯を差し出される。ああ、これは堕落した人類に対するなんと計り知れない犠牲だったことであろう！なんという愛、なんという驚くべき比類のない愛であろう！このお方の愛を示すためにこれらすべての苦しみが明示されたにもかかわらず、わたしたちは自分たちの耐えなければならない小さな試練から後ずさりするのだろうか。わたしたちはキリストを愛しながら、十字架を取り上げることは拒むということができるだろうか。わたしたちは栄光のうちにこのお方と共にいることを愛して、裁判所からカルバリーまでさえもこのお方に従わないことができるだろうか。もしキリストがわたしたちのうちにある栄光の望みであるならば、わたしたちはこのお方が歩かれたように歩くのである。わたしたちは他の者たちを祝福するために、このお方の犠牲の生涯を模倣する。わたしたちはその杯を飲み、そのバプテスマによってバプテスマを受けるのである。わたしたちはキリストのために、献身と試練と自己否定の生涯を歓迎する。天はわたしたちがそれを得るためにどれほど犠牲を払っても安いのである。(教会への証 2 巻 72, 73)

正しい理由のために苦しむ

「あなたがたのうち、だれも、人殺し、盗人、悪を行う者、あるいは、他人に干渉する者として苦しみに会うことのないようにしなさい。しかし、クリスチャンとして苦しみを受けるのであれば、恥じることはない。かえって、この名によって神をあがめなさい。」（ペテロ第一 4:15, 16）

試練によって、主はご自分の子らの強さを試される。心は耐えるに強いであろうか。良心には罪がないであろうか。御霊はわたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることを証するであろうか。主はわたしたちを試みることによって、これを確かめられる。苦悩の炉の中で、このお方はわたしたちをあらゆる不純物から精錬される。このお方がわたしたちに試練をお送りになるのは、不必要な苦しみを生じさせるためではなく、このお方を見上げるようにと導き、わたしたちの忍耐力を強めるためであり、反逆することなくこのお方に信頼を置くならば、わたしたちがこのお方の救いを見るようになることを、わたしたちに教えるためである。

キリストは品性の完全に達することが、容易であるという保証を与えてはおられない。それは葛藤であり、戦いであり、毎日の進軍である。わたしたちが天の王国に入るのは、多くの苦難を通してである。もしわたしたちがこのお方の御座に共に座るのなら、わたしたちはまずこのお方の苦悩にあずかる者とならなければならない。わたしたちは、個人的にキリストについて語られたことを経験しなければならない。「多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであったからである。」「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び」（ヘブル 2:10, 5:8）。それならわたしたちは前進するとき直面しなければならない試練のゆえに、物おじしたり臆病になったりするのであろうか。わたしたちは不平を言ったりつぶやいたりすることなく、それらに立ち向かわないのであろうか。わたしたちにはこの世では悩みがある。しかし主イエスは、わたしたちが求め、このお方が授けてくださると信じるすべての助けを、わたしたちにお与えになる。

神の大いなる真理の刃によって、わたしたちは世の石切り場から切り出され、このお方の宮の場所へ用意されるために主の作業場に入れられたのである。この働きにおいて金槌とのみがその役割を果たさなければならない。それから研磨されることになる。この恵みの過程の下で反抗してはならない。あなたは、あなたが埋めるようにと神の計画された場所のために整えられるまでには、たくさんの働きがなされなければならない粗い石かもしれない。もし試練という金槌とのみがあなたの品性の欠点を切り取ったとしても、驚く必要はない。このお方だけがこの働きを達成することができる。このお方は不必要な一撃を加えることはなさらないということを確信しなさい。一つ一つの一撃は、あなたの永遠の利益と幸福のために愛のうちに打たれる。このお方はあなたの欠点をご存知で、滅ぼすためではなく回復させるために働かれる。このお方は、あなたがご自分のために働き、また苦しむのに強くするために、あなたに試練を送られる。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1907 年 6 月 20 日）

11月19日

本物の謙遜

「互いに従属する者のようになり、謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜うからである。だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい。」（ペテロ第一 5:5-7 英語訳）

竹馬に乗った謙遜、すなわち人に見られるために人々の前で見せびらかしをするといった謙遜がある。神が尊重される謙遜は、魂が自分の無力さを悟った結果の謙遜である。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1892 年 4 月 19 日）

互いにへりくだらせようと熱心になってはならない。みずからを低くしなさい。自分自身の実情を把握し、謙遜な告白によって神の御前に責められるところのない者となりなさい。いやされるように、自分自身の過ちを互いに告白しなさい。告白していない不正行為の重荷を負っている者が、なんと多くいることであろう。彼らは自分たちの尊厳が傷つけられないように、物事を工夫しようとする。過ちを初めから正すということは、彼らにとって自分自身をなくすように見えるのである。彼らは、もし自分たちがこれをすれば、自分たちの有用性は破壊されると考える。もし彼らがこの推論を止め、自分たちを神の御手のうちに置き、それによってこのお方に、自分たちのうちにこのお方の御心を成し遂げていただくならば、彼らはどれほどもっと安全になることであろう。他の者に対する不正行為の告白を延ばすことは、なりゆきにまかせる最も危険な進路である。このようにして、サタンの使いと妥協するのである。告白していない罪の重荷は、負うことのできる最も重い重荷である。偉大なる重荷を負われるお方イエスは、あなたの重荷をご自分に移すように求められる。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1901 年 10 月 30 日）

自分自身についての評価が高ければ高いほど、イエスを必要とする気持ちが少なくなる。真の善は、決して自分を高めない。しかし、自己義はつねに人々の誉れと称賛を得ようとする。彼らは偽りの基準を定め、自分自身に対してあまりにも高い評価をしている。岩の上に落ちて砕かれるすべての者を、キリストは真の純潔と聖潔のうちに築き上げられる。わたしたちは自分たちの生涯の一瞬一瞬を、そのような憐れみ深い贖い主にたいして感謝するべきである。真の謙遜は自分自身の罪を知り、それらを告白するようにわたしたちを導く。それはわたしたちの罪を許すことができ、すべての不義からわたしたちを清めてくださる唯一のお方として、イエスを受け入れるようにわたしたちを導く。……このお方の御腕は救うのに力強く、このお方の恵みは救い出すのに強いのである。このお方はわたしたちが快活な顔つきをし、喜びに満ちた心を抱くことを望まれる。……

あなたの気性は試されるであろう。あなたの忍耐は試みられるであろう。祈りだけが、また真剣な信仰が、これらのことを通してあなたをクリスチャンのようにする。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1888 年 8 月 7 日）

どのようにして信心深い交わりを見分けるか

「わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。」（ヨハネ第一 1:5-7）

サタンはキリストの福音の単純さから魂を連れ去るために、クリスチャンと公言するある者たちを用いる。世俗的仲間や娯楽は、疑いと無神論の種をまく。多くの世的教師たちの心情はこうである、「イスラエルの聖者について語り聞かすな、耳に聞きよいことを語れ、迷わしごとを預言せよ」（イザヤ 30:11, 10）。多くの者は日毎に力のない信心の形式によって、魂を欺いている。しかし主はご自分の微笑みと御霊の霊感を、彼らから取り除かれた。彼らの行いが悪いので、彼らに対して不快に思っておられる。このお方は生活と品性における決定的な変化を要求なさる。良い意図や良い決心、また良い行いは、悔い改めと信仰と自発的な従順の代わりとして受け入れられることはできない。

人々は……自分たちの良心が静められることを愛する。すなわち肉の安全というゆりかごの中で、揺すって眠らされるのを愛するのである。彼らは盲目的な利己心で自分自身を欺く。……「悪を行っている者はみな光を憎む。そして、そのおこないが明るみに出されるのを恐れて、光にこようとはしない」（ヨハネ 3:20）。この時代もそのようである。自分の行いが非難されるのを恐れて、教会は聖書を調べようともしないし、真理に耳を傾けようともせず、その働きはたしなめられることもない。教会は慣習と世の友情から離れるよりは、神の戒めから離れることをいとわない。そして偉大な人々や世俗的知者が教会の味方になり、人数や一時的な繁栄が自分のものとなるので、教会は神に是認されていると信じる。……

しかし地上の繁栄は、神の是認の証拠ではない。……神の真の子は世の友情を楽しむことができない。もし彼がそれを求めるならば、それは彼にとって罠となる。彼は世の慣習や教えや基準を取り入れ、ついには精神が彼らのようになる。しかし、光の君と暗闇の君の間には何の友情もありえない。使徒ヨハネはこのように言っている。「世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である」（ヨハネ第一 3:1, 2）。彼らは世によっては知られず、認められもしない。しかし彼らの名は、罪を愛する者たちによっては邪悪な者として捨てられるが、命の書の中には記される。彼らは天の崇高なお方、キリストの養子になった相続人である。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1884 年 3 月 6 日）

11月21日

完全な型に形づくられる

「わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、父のみもとには、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる。彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。「彼を知っている」と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それによって、わたしたちが彼にあることを知るのである」（ヨハネ第一 2:1-5）

天使たちの奉仕を通して、聖霊は人間という器の思いと心に働きかけて、罪人が罪とサタンの奴隷状態から救出されるために、その魂のために身代金を払われたキリストに彼を引き寄せることができるようになる。しかし、神の御霊は人間という器の自由に干渉しない。聖霊は、人間が神聖な知的存在者たちと協力できるように、助け主として与えられている。そして魂を引き寄せることが聖霊の働きであるが、決して服従を強いることはない。キリストは天のすべての感化を分け与える備えをしておられる。このお方は人にやってくるあらゆる誘惑と、人間という器の能力を知っておられる。このお方は彼の力を量られる。このお方は現在と将来をご覧になり、思いの前に果たされるべき義務を置かれる。そして、ありふれた世的なことに熱中するあまり、永遠の事柄を見失うことがないようにと勧めておられる。主は天の賜物を受けるすべての人に、満ち満ちた恵みをお与えになる。聖霊は、神がゆだねられた力をキリストの奉仕にもたらし、人間という器が変化を真剣に望むのに比例して、人間の器を神の型にしたがって形づくり、築いてくださる。……

イエス・キリストの力と恵みのうちに、ためらいながらではなくしっかりと歩きなさい。このお方に天と地のいっさいの権威がゆだねられている。イエス・キリストの内に避難しなさい。そして信仰のうちに、このお方を愛しこのお方に仕えるために、このお方との揺らぐことのない契約に入りなさい。このお方をあなたの擁護者として選びなさい。なぜなら憐れみの扉は、あなたのために広く開かれているからである。なんでもこのお方のみ言葉に基づいて求め、信仰によって求めるならば、わたしたちの願いはかなえられるというのが約束である。イエスはこのように言われる。「あなたがたが父に求めるものはなんでも、わたしの名によって下さるであろう」（ヨハネ 16:23）。救いの条件を満たすことを怠る魂には言い訳の余地がない。なぜならこのお方の恵みの富は疑う余地なく無限だからである。（ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1894 年 7 月 5 日）

キリストはわたしたちのうちにおられるか

「『光の中にいる』と言いながら、その兄弟を憎む者は、今なお、やみの中にいるのである。兄弟を愛する者は、光におるのであって、つまずくことはない」（ヨハネ第一 2:9, 10）

多くの者は、彼らが本当にイエスを愛しているかいないかを明らかにするために、主が自分たちを試み試しているという事実を自覚していない。彼らの兄弟たちに示された彼らの精神と態度が、彼らの神に対する精神と態度を物語る。……

もし神の愛が、魂における生きた変わることのない要素であるなら、兄弟たちのうちに愛があるであろう。そしてこれまで偉大な教師の戒めに無関心でいた多くの者たち、すなわち今は互いに噛みつき、むさぼり食う者たちも、自分たちの間違いを自覚し、友情へと引き寄せられるであろうに。神はもっと良い事のためにすべての備えをなされた。神の民は接近した激しい戦いを戦わなければならない。しかし、これらの戦いは彼らの兄弟たちに対する戦いであるべきではない。神の働き人の最も弱い者の感化でさえ、傷つけ、弱め、壊そうとするすべての願望は、天の書にイエス・キリストの感化を弱める願望として記録される。わたしたちが着手すべき戦争は、神の民に反対して整列している、悪の同盟に対して行うべきである。しかし、戦争の道具を自分の兄弟に対して向ける者たちはわざわいである。神はわたしたちが天の御使いと一致して戦うべきであるということ、またその戦争に携わっているのは御使いだけではないということを思い出させられる。（ﾎｰﾑ・ﾐｼｮﾅﾘｰ 1896 年 8 月 1 日）

神は、わたしたちが他の者たちに与えることができるようにと、ご自分の祝福をわたしたちに分け与えてくださる。そしてわたしたちが、このお方の愛が流れることのできる通路として、自分自身を明け渡す限り、このお方はその通路を満たし続けてくださる。あなたが日毎の糧を神に求めるとき、このお方はあなた自身よりももっと困っている者たちに、同じように分け与えるかどうかを見るために、あなたの心をのぞき込まれる。あなたが「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と祈るとき、このお方はあなたが交わる者たちに憐れみを示すかどうか見ようと見張っておられる。これが、わたしたちが神とつながっているという証拠、すなわち天におられる御父が憐れみ深いように、わたしたちが憐れみ深いかどうかという証拠である。もしわたしたちがこのお方の者であるなら、このお方がわたしたちにするようにと告げられることを、それがどんなにわたしたちに不都合でも、どんなにわたしたちの気持ちに反するものであっても、快活な心で行う。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1893 年 6 月 27 日）

わたしたちは自分たちのうちに神の御霊を悲しませるようなことを大事にしてはいないかを調べ、またわたしたちが他の人々にとって祝福となるためになすべき働きを理解するために、厳密な自己診断を実行する必要がある。（同上 1885 年 12 月 22 日）

11月23日

天へと向かって

「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである。世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる」（ヨハネ第一 2:15-17）

人が世の流行を真似ようと願い、それを直ちに抑えることをしないとすぐ、神は彼らをご自分の子らとして認めることをやめられる。（教会への証 1 巻 137）

改心はほとんどの者が喜ばない働きである。世的な罪を愛する思いを改変し、この思いに、言語に絶するキリストの愛、このお方の恵みの魅力、神の麗しさを理解させて、それによって魂が神の愛に染められ、天の奥義に魅了されるというのは、決して小さいことではない。彼がこれらの事柄を理解するとき、彼にとって以前の生活は実に嫌な、憎らしいものに見えるようになる。彼は罪を憎み、神の御前に心を砕いて、キリストを魂の生命、喜びとして受け入れる。彼は自分の以前の楽しみを捨てる。彼は新しい思い、新しい愛情、新しい興味、新しい意志を持つ。彼の悲しみ、彼の願いと愛はまったく新しくなる。これまでむしろキリストより好きであった肉の欲、目の欲、持ち物の誇りは、今や捨てられ、キリストが彼の人生の魅力、喜びの冠となる。かつては何の魅力もなかった天国は、その富と栄光のうちに眺められる。そして彼は、そこで自分を贖ってくださったお方を見、愛し、讃美することになる天国を自分の未来の家庭としてじっと見つめる。……

かつてはうんざりするように見えた、聖潔の働きは、今は彼の喜びとなる。退屈で興味のなかった神のみ言葉が、今は彼の研究の対象、相談相手として選ばれる。それは永遠のお方の文字を刻んだ神からの彼にあてた手紙である。彼の思想、彼の言葉と行いはこの基準に合わされ、試される。彼はみ言葉の中に含まれている命令と威嚇に恐れおののくと同時に、その約束を把握し、それを自分に適用して、自分の魂を強める。今は彼によって最も信心深い者の社会が選ばれ、以前彼がその交際を愛していた悪を彼はもはや楽しまなくなる。彼は、かつて自分が笑っていた罪を嘆き悲しむ。自己愛と虚栄心は捨てられ、彼は神に生き、良いわざに富む。これが、神が要求なさる聖化である。このお方はこれ以外の何ものもお受け入れにならない。（同上 2 巻 294, 295）

精錬

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。」（ヨハネ第一 3:2-5）

世に仕えまた神を愛することができると考える者たちは、二心の者である。しかし、彼らは神と富に仕えることはできない。彼らは世を愛し神に対する自分たちの義務感をすべて失っているが、それでもキリストに従う者であると公言している、二つの思いを持つ者たちである。彼らは一方の側の者でもないし、他方の側の者でもない。彼らは真理の清い原則への従順を通して、自分たちの手を洗い清め、心を清らかにしない限り、両方の世界を失う。（教会への証 1 巻 530）

熱烈な祈り、謙遜と真剣さは、神の御助けと結合されなければならない。なぜなら人間の弱さと人間の感情は、絶えず支配権を求めて争っているからである。一人一人が真理への従順を通して、自分の魂を清めなければならない。そして神の栄光にだけ目を向けて、自己をへりくだらせ、イエスとこのお方の恵みを高めなければならない。このように絶えず光に向かって前進することによって、彼は神を良く知るようになり、またこのお方の助けを受けるようになる。（同上 5 巻 109, 110）

自己否定と自己犠牲的な従順のうちに、神に自分自身を適応させよう。キリストを信じる信仰はいつも自発的で快活な従順へと導く。このお方はわたしたちをすべての不法から贖い出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身の者として聖別するために死なれた。思いと言葉と行動の中に、神の御心への完全な一致があるべきである。天国は自分たちの魂を真理への従順を通して清めた者たちのためだけにある。そこは汚されていない純潔だけが、住むことができるところである。……

完全な従順の中に完全な幸福がある。「わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」（ヨハネ 15:11）とキリストは仰せられた。主がわたしたちを祝福し、わたしたちの信仰を強め、わたしたちがまだ登っていない高さまで前に向かって導いてくださるように。このお方は、わたしたちがすべての不法から清めていただけるために、わたしたちのために死なれるようにとキリストを与えられた。このお方は、わたしたちが真理によって聖別されるために、ご自分の霊をわたしたちの上に注いでくださると約束された。このお方は、わたしたちがこの教えへの従順を通して聖としていただくことができるために、わたしたちにご自分のみ言葉を与えてくださった。恵みのうちに成長することは、わたしたちの特権であり義務である。神のみこころは、あなたがたが清くなることである。（聖書訓練学校 1905 年 2 月 1 日）

11月25日

わたしたちはどちらの兄弟に似ているか

「神の子と悪魔の子との区別は、これによって明らかである。すなわち、すべて義を行わない者は、神から出た者ではない。兄弟を愛さない者も、同様である。わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。カインのようになってはいけない。彼は悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺したのか。彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである」(ヨハネ第一3:10-12)。

エホバの律法に和解していない者たちは、律法を聖であって正しくかつ善なるものと呼び、神の律法を拡大する者たちと和解していない。彼らはカインがアベルに対して示した、同じ敵意と悪意と憎しみの精神を示す。弟は祭壇に犠牲を持ってくることによって、神の明白な指示を実行したが、カインは無限のお方の判断よりも自分の判断を高め、自分の考えに従って捧げ物を持ってくることを決心した。主がアベルの行動に対する承認を明らかにされ、カインの捧げ物を受け入れることを拒まれたとき、カインはうらやみと嫉妬、また憎しみによって満たされた。……

クリスチャン世界の実に多くの人々が、カインがたどった道順にならう行動をとっている。主は人間にご自分の律法を与え、ご自分の戒めを守る者たちを祝福すると約束された。第四条の中でこのお方は人に、このお方の創造のみわざと力の記念日である安息日を守ることを命じられた。しかし人々は多くの作り事を探し出し、創造の力の記念日である主の安息日が退けられ、罪深い人間によって律法は無効にされ、その一方で偽りの安息日が真の安息日にとって代わって制定されるまで、サタンは自称クリスチャン教会の信仰と教理の中に、自分の方法を巧妙に取り入れることを許されてきた。人々は週の第一日がキリストの死からのよみがえりを祝して記念日とされていると宣言するが、その一方で神のみ言葉のなかにはこれを要求している聖句は一つも見出すことはできないのである。……多くの者は、十誡が型と犠牲の礼典律と共に十字架に釘付けにされたと宣言し、それらを完全に一掃する。このお方のよみがえりを記念した一日を守ることによって、御子をあがめていると公言しながら、彼らはエホバの律法に軽蔑を注ぎ、神が命じられなかったものを捧げ、このお方が与えられた明白な命令を無視することによって、カインの進路をたどっているのである。アベルが従ったように神の声に従う者たちは、不服従な者たちの手から、アベルが受けた取り扱いに類似した取り扱いを受ける。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1896年1月9日)

無神論者は
そのままにしておきなさい

「愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである。あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。」（ヨハネ第一 4:1-3）

今の時代の世の中でわたしたちは、ありとあらゆる程度や度合いの無神論を見る。降神術の偽りの不思議を信じ、神の真理の主張を拒む、ひどい不信仰者がいる。これらすべての者は、ヨハネが書いた部類の者たちのただ中に属しており、反キリストの精神に支配されている。神のご品性についての無知、理解力の誇り、罪への愛が不信の源である。人はキリストの神性を否定し、聖書を投げ捨て、そうすることによって神への個人的な説明責任から免れようと努める。……これらの疑い深い者たちは、最も謙虚で敬虔なクリスチャンがどのように答えていいか分からないで、当惑する質問をもちだすことができる。しかし彼らの質問が答えられないということが、聖書が真実ではないという証拠ではない。……神のみ言葉の真理はへりくだった心を持ち、神のみ言葉の義務を理解し、その教えに従う者たちに明らかにされる。無神論へと導き、イエス・キリストの神性を否定するように導くのは自分の意見に対する誇りである。無神論は、罪への愛、野心への愛とうぬぼれを起源とする。

世の贖い主であられるイエスは、わたしたちのすべての祝福がもたらされる通路であられる。だからこのお方を神の神聖なる御子として認めることを拒む者たちは、事実上わたしはこの人に自分を支配してもらうつもりはないと言っているのである。我意を通し、誇りと自尊心で得意になっている者たちは、自分の意志を神のみ旨に調和させるために明け渡そうとしないが、その一方で偽預言者の惑わしを受け入れ、こうしてキリストを神の御子として認めることを拒むように導かれる。……不信心者のとる立場をとったことはないものの、不信心の第一段階にいる者たちが多くいる。彼らは神聖な性質のものに何でも疑問をさしはさみ、すべてを通俗的な生来の事柄の水準にまで下げようとする。彼らの思いはスポンジのようで、不信をほのめかすものを何でも吸収する。彼らはこれらのほのめかしを他の人々に伝え、このようにして無神論の種をまく。そして自分たちがまいたものを刈り取るのである。信者が無神論者によって持ち出された一つの質問に答えようとすると、彼は次々と質問を持ち出すのである。とるべき唯一の方法は、無神論者が真に光を願うようになるまでは彼をそのままにしておくことである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1894 年 9 月 3 日）

11月27日

わたしたちのうちに
全うされるこのお方の愛

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。神を見た者は、まだひとりもいない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。」(ヨハネ第一 4:10-12)。

信仰は愛によって働き、魂をすべての利己心から清める。このようにして魂は愛のうちに全うされるのである。そしてキリストの尊い血を通して恵みと憐れみとを見出したのであるから、わたしたちはやさしくあわれみ深くなることにどうして失敗できるであろうか。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1910 年 3 月 17 日)

他人の欠点を探す代わりに、自分自身を批判しよう。一人一人が、わたしの心は神のみ前に正しいだろうか、わたしは天父に栄光を帰しているだろうか、と尋ねなければならない。もし、あなたが悪い精神を抱いていたならば、それを魂から追い払いなさい。神聖さを汚す性質のものは、すべて心から根こそぎにしなさい。他人が有害な影響によって汚染されないように、苦々しいすべての根を引き抜きなさい。あなたの心の土に一本の毒草でも残るのを許してはならない。今その根を抜き去り、その代わりに愛の植物を育みなさい。魂の宮に、イエスに内住していただこう。(同上 1904 年 2 月 25 日)

もしもキリストが心に内住しておられるなら、キリストの愛はその所有者を通して他の人々に放散し、心と心を結びつける。キリストの恵みがクリスチャンの唯一頼るものでなければならず、そうである時、その人はキリストが自分を愛されたように兄弟を愛する。その時その人は「来たれ」と言うことができ、その人々に神と和解するようにと懇願しつつ、魂に嘆願し、しきりに求めることができる。その人の感化はますます決定的なものとなり、自分のために十字架にかかられたキリストに自分の生涯を捧げるようになるのである。愛が全うされるところでは律法が守られる。そして自己には場所がない。神を最高に愛する者はご自分の命を自分たちのために与えてくださったお方のために働き、苦しみ、そして生きる。……わたしたちが天の賜物であるキリストの義を受ける時、神の恵みがわたしたちのために備えられており、人間の手段は無力であることが分る。イエスはわたしたちの弱さを助けるために、わたしたちに力強い励ましを与え、わたしたちの思いを啓発し、わたしたちの心を清め、気高くするために、非常時に備えて大いに聖霊をお与えになる。キリストはわたしたちの知恵となり、義と聖と贖いとになられる。クリスチャン生涯の初めから終りまで、キリストなくしては一歩といえども成功する歩みはできない。キリストは、わたしたちと共に絶えずいるようにと、御霊を送られたので、キリストをこの上なく信頼することにより、わたしたちの意志をこのお方に捧げることにより、わたしたちはこのお方が行かれるところへはどこへでもついて行くことができる。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1894 年 6 月 26 日)

11月28日

キリストにある勇気

「わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、さばきの日に確信を持って立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである。わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである。」(ヨハネ第一 4:17-19)。

イエスへの愛は見られ、感じられるようになる。それは隠れることができない。その愛は驚くべき力を発揮する。臆病な者を大胆にし、怠け者を勤勉にし、無知な者を賢くする。それはどもる舌を雄弁にし、眠っている知性を新しい命と活力に目覚めさせる。その愛は落胆している者を希望にあふれた者とし、陰うつな者を喜びに満ちた者とする。キリストへの愛はそれを持つ者がこのお方のために責任を引き受けるように、またこのお方の力のうちにその責任を担うようにと導く。キリストへの愛は苦難によって揺らぐことも、また非難によって義務から逃れることもない。イエスに対するこの愛を吹き込まれていない魂は、このお方のものではない。

キリストにある平安は地上のあらゆる宝よりも価値がある。わたしたちは全心をもって主を求めよう。柔和で心のへりくだった者となるためにキリストから学ぼう。そうすればわたしたちは魂の休息を見出すことができる。わたしたちはこの睡眠状態の精力を目覚めさせて、活発で、真剣で、熱心になろう。クリスチャンの言葉と同様に、まさしく模範と態度こそが、罪人の内に命の泉であるお方の許へ来たいという願いを呼び覚ますものとなるべきである。

わたしたちは義の太陽の明るい光線に対して心を開こうではないか。わたしたちの主人であられるお方の奉仕において、快活に喜びつつ働こう。信仰を告白しながら怠惰で無気力な者に対して、神の御国の門が広く開かれることはない。十字架から冠まで、真剣な働きがなされなければならない。生まれつきの罪との格闘がある。外に現れた不正に対する戦いがある。

クリスチャンの生涯は戦いと進軍である。わたしたちは不朽の冠を得ようと努力しているのであるから、前進しよう。わたしたちの召しと選びとを確かなものにするために、勤勉になろう。もしわたしたちが善を行うことに、うみ疲れなければ、ついには勝利を得るのである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1887年11月29日)

しっかりと、勇ましく、勇敢に前進しなさい。あなたは判断を誤るかもしれないが、イエスから手を離してはいけない。……あなたが押しのけられ、誤解され、偽って申し立てられ、誤り伝えられれば伝えられるほど、主なるお方のために働きをなしているという証拠をさらに持つのである。そして、あなたはもっとあなたの救い主にぴったりとしがみつかなければならない。あらゆる困難のなかで、穏やかで乱されることなく、忍耐深く寛容であり、悪に悪をもってではなく、悪に善をもって報いなさい。はしごの頂きを見なさい。神がその上におられる。このお方の栄光は、天に向かって上っている一人ひとりの魂の上に輝いている。(教会への証8巻130)

11月29日

究極の試練

「『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている。すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から生れた者である。すべて生んで下さったかたを愛する者は、そのかたから生れた者をも愛するのである。」（ヨハネ第一 4:20-5:1）

利己的で、愛することもできず、思いやりもない自分たちの方法を変え、キリストの御霊は利己的でも気難しくもなく、また粗野で愛のない霊ではないということを学ばないかぎり、多くの者たちが天を失ってしまう。……わたしたちがキリストの方法を実践し、このお方の御霊を受け入れなければ、わたしたちはこのお方の者ではない。わたしたちのすることはすべて深く変わることのない愛の原則、すなわち愛と光と平和であられるキリストのかたちにかたどった原則から流れなければならない。しかしなんとキリストの品性が少し、ほんの少ししか現されていないことであろう！（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1900 年 4 月 3 日）

愛は信心の基礎である。自分の兄弟に対して無我の愛を持っていなければ、だれがどんなに公言していようとも、彼は神に対する愛を持っていない。神がわたしたちをまず愛してくださったがゆえに、わたしたちが神を愛するとき、わたしたちはキリストがそのために死なれたすべての人を愛する。わたしたちは、大いなる危険のうちに、また大いなる困窮のうちにある魂が警告されずに、労されることなく、また心にかけられることなく見過ごしにされるままにしておきたいと思わなくなる。わたしたちは誤っている人々を寄せつけずに、批判的で厳格になったり、あるいは彼らがさらなる不幸と失望に急落し、サタンの戦場に落ち込むままにしたりしようと思わなくなる。……好きかってに責め、落胆させ、失望させてきたすべての人、また誘惑され、試みられている人々に優しい親切や同情やあわれみを示さずにきたすべての人は、自分自身の経験の中で他人が通ってきた経験をするように導かれ、彼らの心のかたくなさに苦しみ、ついに自分の心のかたくなさに嫌気がさし、イエスに入ってきていただくように戸を開くようになるまで、他人が自分の同情の足りなさのゆえに何に苦しんできたかを感じるようになる。神の改心させる力は神の働きと御事業に幾分でも携わっているすべての魂に及ばなければならない。それは各々がキリストの愛と同情に満たされるためである。さもなければ多くの人が決して天国を見ることはできない。親友の間に示される相互の称賛は試練のテストに耐えない。なぜならそれは聖なる性格のものではないからである。キリストが魂のうちに住まわれるとき、このお方は最も向上する必要のある者たちを向上させることであらわされる。わたしたちの隣人は、わたしたちの助けを必要としている一人ひとりである。わたしたちの隣人は、敵によって傷つけられ砕かれている一人ひとりである。わたしたちの隣人は、神の財産である人間の一人ひとりである。（同上 1895 年 1 月 8 日）

キリストの教理にとどまる

「すべてキリストの教をとおり過ごして、それにとどまらない者は、神を持っていないのである。その教にとどまっている者は、父を持ち、また御子をも持つ。この教を持たずにあなたがたのところに来る者があれば、その人を家に入れることも、あいさつすることもしてはいけない。そのような人にあいさつする者は、その悪い行いにあずかることになるからである。」（ヨハネ第二 9:11）

わたしたちの信仰は聖なるものである。わたしたちの働きは神の律法の誉れが正当であることを立証することであり、それは思いまたは行状において、誰をも低い水準に低下させる性質のものではない。真理と入り交じった自分自身の間違った空想的な考えを持っており、真理を信じていると公言しそれを教える者が多くいる。しかしわたしたちが立つために、高められた基礎がある。わたしたちは、イエスの内にあるそのままの真理を信じ教えなければならない。心の聖潔は不純な行動に導くことは決してない。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1885 年 11 月 10 日）

真の信仰は聖書の上に築かれている。しかし、サタンは聖書を曲げ、間違いを取り入れるために多くの手段を用いるので、もし人が、それが本当に何を教えているかを知りたいのなら、非常に注意を要する。感情にこだわり、み言葉が自分の気持ちと一致しないので、神のみ言葉の明白な言葉を無視する一方で、正直を主張することはこの時代の大いなる欺きのひとつである。多くの者は感情以外に、自分たちの信仰の基礎となるものがない。彼らの宗教は興奮で成り立っている。それが止むと彼らの信仰は無くなる。気持ちはわらかもしれないが、神のみ言葉は麦である。そして「わらと麦とをくらべることができようかと」（エレミヤ 23:28）預言者は言っている。（同上 1884 年 11 月 25 日）

神は、われわれが、行かなくてもよいのに誤りを聞きに行くのを、お喜びにならない。なぜなら、意志の力によって人々に誤りが強いられているこれらの集会に、神がわれわれをつかわされるのでないかぎり、神は、われわれを保護されないからである。天使たちは、われわれを守護することをやめる。そして、われわれは、敵に攻撃されるままに放置され、サタンと彼の悪天使たちの力によって、暗くされて弱められる。そしてわれわれの回りの光は、暗黒によって汚される。（初代文集 231）

真理全体は無効にしたり、訂正したりすることができると教える多くの人々よりも、真理と誤りの混じりあったものを持っているひとりの人によってもっと多くの害がなされる。……誤りは心の土にもっとたやすく根を下ろすのである。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1888 年 5 月 29 日）

混じりけのない教理は、義の行いと調和する。天来の教えは、聖なる実践と混ざり合う。キリストの恵みによって満たされた心は、その平安と喜びとによってあらわされる。そしてキリストが住まわれるところでは、品性が清められ、高められ、高尚にされ、栄化される。（ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1894 年 11 月 8 日）

研究 7

神の憐れみの最後の招き

「それが信仰」

神の義を受ける方法は一つであるのに、なぜ古い契約と新しい契約が必要であったのでしょうか。それは、受けたときの人の状態を見てみましょう。

「あなたがたが近づいているのは、手で触れることができ、火が燃え、黒雲や暗やみやあらしにつつまれ、また、ラッパの響や、聞いた者たちがそれ以上、耳にしたくないと願ったような言葉がひびいてきた山ではない。そこでは、彼らは、『けものであっても、山に触れたら、石で打ち殺されてしまえ』という命令の言葉に、耐えることができなかったのである。その光景が恐ろしかったのでモーセさえも、『わたしは恐ろしさのあまり、おののいている』と言ったほどである」（ヘブル 12:18-21）

古い契約は、「人がその友と語るように、主」が「顔を合わせて語られた」モーセがおののくほど恐ろしい光景の中で与えられました。なぜそれが必要だったのでしょうか。

主は「信じさせるためである」と言われました（出エジプト 19:11）。

新しい契約を与えられたアブラハムの時には、このような光景は必要ありませんでした。それは、「アブラムは主を信じた」からです。「主はこれを彼の義と認められた」（創世記 15:6）

しかし、出エジプトのイスラエルは、神の約束を信じませんでした。そのため、自分たちの約束により頼んだのでした。「そして契約の書を取って、これを民に読み聞かせた。すると、彼らは答えて言った、『わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います』」（出エジプト 24:7）。

一方、アブラハムは主を信じたため、神が、ご自分の義を彼の口座に入れて下さったのでした。

では、古い契約と新しい契約は、内容が違ったのでしょうか?

古い契約でも、神が下さったのはご自分の律法でした。そして、この律法は、「信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである」(ガラテヤ 3:24)。

アダムの時から与えられていた律法が、「信仰による義認」のために、シナイ山でもう一度与えられたのでした。はじめから信仰によって義とされる方法は一つです。そのためには、キリストの許へ行かなければなりません。ですから、人の状態に合わせて、与える方法は変えてくださいましたが、神が下さった契約はいずれも「キリストに連れて行」き、「信仰によって義とされるため」であったことがわかります。

「もしアブラハムが、その行い(すなわち、「みな行います」と言ったときのように、古い契約)によって義とされたのであれば、彼は誇ることができよう。しかし、神のみまえでは、できない。 なぜなら、聖書はなんと言っているか、『アブラハムは神を信じた。それ(すなわち、神の約束を信じた新しい契約)によって、彼は義と認められた』とある」(ローマ 4:2, 3)。

「ところがキリストは、はるかにすぐれた務を得られたのである。それは、さらにまさった約束に基いて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。もし初めの契約に欠けたところがなかったなら、あとのものが立てられる余地はなかったであろう。ところが、神は彼らを責めて言われた、『主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ日が来る。 それは、わたしが彼らの先祖たちの手をとって、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようなものではない。彼らがわたしの契約にとどまることをしないので、わたしも彼らをかえりみなかったからであると、主が言われる。わたしが、それらの日の後、イスラエルの家と立てようとする契約はこれである、と主が言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつけよう。こうして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう。 彼らは、それぞれ、その同胞に、また、それぞれ、その兄弟に、主を知れ、と言って教えることはなくなる。なぜなら、大なる者から小なる者に至るまで、彼らはことごとく、わたしを知るようになるからである。……

神は、「新しい」と言われたことによって、初めの契約を古いとされたのである。

年を経て古びたものは（すなわち、人の約束に基づいたもの）、やがて消えていく」（ヘブル 8:6-13）。

「キリストは、ご自分の教会員に真実な本物の福音の希望を抱くよう召しておられる。このお方は彼らに上方を指し示し、はっきりと下ではなく上にある永続的な富を保証しておられる。彼らの望みは地上にではなく、天にある」（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1904 年 6 月 23 日）

それでは、神の義を得させる信仰とは、どのようなものでしょうか。

アーメン – 生きた信仰

「アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた」（創世記 15:6）。

アーメン＝ヘブル語では、「神の仰せになった通りになるように」という意味です。この「アーメン」のない人たちについて、下記のように述べられています。

「人の子よ、あなたの民の人々は、かきのかたわら、家の入口で、あなたの事を論じ、たがいに語りあって言う、『さあ、われわれは、どんな言葉が主から出るかを聞こう』と。彼らは民が来るようにあなたの所に来、わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言葉を聞く。しかし彼らはそれを行わない。彼等は口先では多くの愛を現すが、その心は利におもむいている。見よ、あなたは彼らには、美しい声で愛の歌をうたう者のように、また楽器をよく奏する者のように思われる。彼らはあなたの言葉は聞くが、それを行おうとはしない」（エゼキエル 33:30-32）。

アーメンがないということは、主の言葉を信じないということです。これが欠けているとき、その欠乏を補おうとして、人は自分の約束をします。これが、神の義を知らない無知の時代なのです。

「主の言葉が、昔ヘブル人に語られたとき、「すべての民は『アァメン』ととなえよ」というのが命令であった。契約の箱がダビデの町に運び入れられたとき、喜びと勝利の詩篇が詠唱（えいしょう）された。『その時すべての民は「アァメン」と言って主をほめたたえた』。この熱烈な応答は、彼らが語られた言葉を理解し、神の礼拝に加わったことの証拠であった。

わたしたちの宗教礼拝において、あまりにも形式がありすぎる。主はみ言葉を説くご自分の牧師たちがご自分の聖霊によって力づけられることを望んでおられる。また聞く民がものうげな無関心のうちに座っていたり、言われたことに対し

て何の反応も示さずぼんやりと宙を見つめているようなことがあってはならない。未信者に与えられるこのような印象は、キリストの宗教に対して不利なものにしかならない。これらの鈍く不注意な自称クリスチャンは、世の仕事に携わっている時には、大望や熱心さに欠けていることはない。しかし永遠の重要性をもつ事柄は彼らを深く動かさないのである。神の使命者を通して語られる神のみ声は、心地よい歌のようかもしれない。しかし、その聖なる警告、譴責、また励ましはみな心に留められない。世の精神が彼らを麻痺させている。神のみ言葉が鉛のように重い耳と頑なで感動しない心に語られる。はっきり目覚めた諸教会が、キリストの牧師たちを励まし支えて、魂を救う働きに携わるのを助けなければならない。光のうちに歩んでいる教会があるところには、いつでも快活で心からの反応と喜びの讃美の言葉があるのである」(教会への証 5 巻 318)。

どのように主のご計画にアーメンと答えることによって、その御心がなったことでしょうか。

「『… そして、わたしがあなたがたの先祖に、乳と蜜との流れる地を与えると誓ったことを、なし遂げると。すなわち今日のとおりである』。その時わたしは、『主よ、仰せのとおりです』と答えた」(エレミヤ 11:5)。主の契約は、主がなし遂げると言われたことに、『アーメン』と答えた人、すなわち信じた人になし遂げられます。

「なぜなら、神の約束はことごとく、彼において『しかり』となったからである。だから、わたしたちは、彼によって『アァメン』と唱えて、神に栄光を帰するのである」(コリント第二 1:20)。

信仰と行いについては、ヘブル書、ローマ書、ヤコブ書で教えられていますが、なぜ信仰でなければならないのでしょうか。なぜなら、信仰は、神の約束に基づいているからです。なし遂げてくださるのは、神です。それを信じるのが、「アーメン」です。

「このようなわけで、すべては信仰によるのである。それは恵みによるのであって、すべての子孫に、すなわち、律法に立つ者だけにではなく、アブラハムの信仰に従う者にも、この約束が保証されるのである。アブラハムは、神の前で、わたしたちすべての者の父であって、『わたしは、あなたを立てて多くの国民の父とした』と書いてあるとおりである。彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、『あなたの子孫はこうなるであろう』と言われているとおり、多くの国民の父となったのである。すなわち、およそ百歳となって、彼自身のか

らだが死んだ状態であり、また、サラの胎が不妊であるのを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかった。彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。だから、彼は義と認められたのである。しかし『義と認められた』と書いてあるのは、アブラハムのためだけではなく、わたしたちのためでもあって、わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたかたを信じるわたしたちも、義と認められるのである。主は、わたしたちの罪過のために死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえらされたのである」(ローマ 4:16-25)。

（48 ページの続き）

が、わたしを裏切ろうとしている」。

弟子たちはこれらの言葉になげき、驚きました。各自は自分たちの主に対してなにか邪悪な考えのかげがありはしないかと自分たちの心の中をさぐり始めました。

次々に彼らは尋ねました。「主よ、まさか、わたしではないでしょう」

ユダだけがだまっていました。そのため、すべての人の目が彼に引きつけられました。自分が見られていることに気づいて、彼もたずねました「先生、まさか、わたしではないでしょう」。

するとイエスさまは厳粛にお答えになりました、「いや、あなただ」（マタイ 26:21, 22, 25）。

イエスさまはユダの足を洗われました。しかし、それで彼がもっと救い主を愛するようにはなりませんでした。彼は、キリストがしもべの働きをなさったことを怒りました。いま彼はキリストが王にさせられることはないことを知り、ますますこのお方を裏切る決心をかためました。

自分の目的が知られているのがわかったときでさえ、彼は恐れをおぼえませんでした。怒りのうちに急いで部屋を出ていき、自分の邪悪な計画を実行するために立ち去りました。ユダが出て行くと、そこにいたすべての人々はほっとしました。救い主のお顔はあかるくなり、そのためにかげが弟子たちから取りのけられました。

キリストはいま弟子たちとしばらく話されました。このお方は、彼らの場所を用意するためにご自分の御父の家に行くと、そして、彼らをご自分の所に連れていくためにもう一度来ると言われました。このお方はご自分がいないあいだ、彼らの教師となり、またなぐさめ主となる聖霊を送るとお約束になりました。このお方は彼らにご自分の名によって祈るようにお命じになりました。そうするならば彼らの祈りはたしかに答えられるのでした。

それから、このお方は彼らが悪から守られるように、そしてご自分が彼らを愛したように彼らも互いに愛するようにと彼らのために祈られました。

イエスさまは初めの弟子たちのために祈られたように、わたしたちのためにも祈られたのです。このお方は次のように言われました、

「わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。･･･ わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを世が信じるようになるためであります」（ヨハネ 17:20 － 23）。

筑前煮

■材料

ごぼう	1 本
れんこん	10cm
里芋	10 個
しいたけ	5 個
こんにゃく	1 個
グルテン	1 缶
いんげん豆	1 袋
にんじん	1 本
昆布粉末だし	4g
オリーブ油	適量
黒砂糖	少々
しょう油	大さじ 3
塩	少々

■作り方

1. すべての材料を一口大に切る。
2. いんげん豆以外をオリーブ油で炒める。
3. れんこんの歯ごたえが残っている程度に火が通ったら、水をひたひたにかぶるくらいまで入れ、調味料を加えて煮る。
4. 材料が煮えてから、いんげん豆を加え、いんげん豆が煮えるまで 5 分くらい煮る。

グルテンは、厚揚げに代えることができます。寒い季節にどうぞ。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

イエスの物語

第 32 話

過ぎ越しの夕食にて（III）

救い主は他の人々のために働くためにこの世に来られました。このお方は貧しい人や罪深い人を助け、救うために生きられました。このお方はわたしたちが、ご自分のなさったようにすることを望んでおられます。

弟子たちはいま、自分たちのねたみと利己心を恥じました。彼らの心は自分たちの主とお互いへの愛に満たされました。いま彼らはキリストの教えに注意を向けることができました。

彼らがまだ食卓についていると、イエスさまはパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われました、「『これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい』。

食事ののち、杯も同じ様にして言われた、『この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である』」（ルカ 22:19，20）。

聖書は「あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」と語っています（コリント第一 11:26）。

パンとぶどう酒は、キリストの体と血を表しています。パンがさかれ、そしてぶどう酒が注ぎ出されたように、十字架上でキリストの体がさかれ、このお方の血がわたしたちを救うために流されたのでした。

パンを食べ、そしてぶどう酒を飲むことによって、わたしたちはこれを信じていることを示します。わたしたちが自分の罪を悔い改め、キリストを自分たちの救い主として受け入れたことを表すのです。

弟子たちはイエスさまと共に食卓についていました。彼らはこのお方がまだ大いに悩んでおられるようなご様子であるのを見ました。雲がみんなの上にたれこめ、彼らはだまって食べました。

ついにイエスさまは語って言われました。「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたのうちのひとり

（43 ページに続く）